
龍炎のツガイと魔のオウサマ

カゲノシタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍炎のツガイと魔のオウサマ

【Nコード】

N6652X

【作者名】

カゲノシタ

【あらすじ】

「友情とは、2つの肉体に宿る1つの魂である」
その言葉を信じ、親友の後を追うように異世界へと旅立つ社会人2年目の男。

召喚された俺達は、道具であって人ではない。それが、最初に伝えられた事実であった。
その中で親友と仲間達と、世界を変えていく事になる。そんな、男の物語。

主人公達はチート、ご都合主義でハッピーでシリアスにそんな作品

を目指していきます！

メールにて（前書き）

こちらの小説は、不定期更新です。素人が書き始めた作品ですので稚拙な文章です。作者が筆になれるという意味が多くしめております。

主人公チートもの、ハーレム要素等が多大に含まれます。それを踏まえた上で

お読みください。

メールにて

前略

今まで、色々とお世話になりました。その御恩一生忘れる事はありません。不肖の息子の最後の我がままとして、この世界からいなくなる事をお許しください。死ぬわけではありません。決して死んだ訳ではありません。ただこの世界から居なくなるというだけだと思います。親孝行もあまりせず、旅立つ私を許してください。今まで、幾度となく聞いた言葉を胸に自分の人生を楽しむため、私はこの世界から居なくなる事を決めました。もしかしたら、またこちらの世界に戻ってくるかもしれません。その時は、どうぞ暖かく迎えてくれることを切に願う所存であります。最後となりましたが、我が両親及び我が姉妹のこれからの人生に幸せが多く訪れる事を違う空のしたで願っております。簡単ではありますが、これをこの世界との別れの挨拶とさせていただきます。

草々

10/12日 草野木 陰人

携帯の画面に表示される文字に誤字等が無い事をしっかりと確認する。文章がおかしなことになっているかもしれないが、俺に文才はないから気にする事は無い。

「よし、誤字、脱字問題なし。あとは送るだけか・・・」

母親あてに遺書まがいのメールを送ろうと携帯の送信ボタンに指をかけた。

うん??どうした?俺が遺書まがいなメールを送ろうとしている理由?それは、今絶賛俺の体を穴に引きずり込もうとしている黒い手があるからさ。この世の神秘を体験中って訳だ。科学で証明出来ない事ってやっぱりあるんだな。

そういうことは、普通突然起こるんじゃないのかって？

まあ、確かに。普段日ごろからこんなメールを作っている奴がいたら間違いないけどソイツは変人か変態だろ。

じゃあ、お前は変態・・・

言っとくが俺は変態では無い。ロリコン？あれは趣向が他人とズレているだけだ。心配するな変態では無い。まあ、俺はロリコンではないがな。

じゃあ、メールを・・・

しゃーねえな、説明っていうか回想？で勘弁してくれよな。俺も全部分かっている訳じゃないからな。俺だって、あのときまではファンタジーとかには憧れていたただだったんだ。

メールにて（後書き）

やってしまった。後悔はしていない。

お読みいただきありがとうございます。感想等お待ちしております。

旅立ちの時（前書き）

誤字、脱字ありましたら教えていただけるとありがたいです。

旅立ちの時

「おい、そつち抜けたぞ！カバーしろ！！カバーしろって！！！」
もし、1人の部屋でこんな事を声出してらイタイ子だと思う。が、その声に応じるようにモニターから声がする。

「分かってる！！何度も言うな！こつちだつて忙しいんだよ！！」
俺は、仕事から帰宅し小学校くらいからの付き合いのある友人とゲームをしていた。ゲームをする場合1人で淡々とするのが当たり前だが、最近のゲームは1人で遊ぶ為のシナリオとネットを通じて、対戦といった事を楽しめる機能がついている事が多く、俺達もそれを利用して。マイクやそれ用のアクセサリーを買えば、今みたいに会話しながらゲームが出来るからだ。普段は雑談しながらゲームをしているのだが、チームで対戦となるとそうもいかない。どうしても熱くなってしまうのが男だからだ。

「うし、一機撃破！そつちはっ！？」

「オラアア！死ねやゴラアアアツツ！！うっしやー！撃破！つごの獲物は・・・アイツだアアア！！」

友人のテンションは今、乗り込んでいるらしかった。無謀にも敵陣に単騎特攻をかけながら、画面の向うで「ヒヤッハー！！当たるか、そんな弾！」とか聞こえてくる。そのうち汚物は「消毒だー！ー！！」とか言ってるし。今現在のスコアが4：6。こちらが残り4機で相手が6機だ。さっきまでダブルスコアだったのをなんとか僅差まで持ち直した。

「こつからは気合いれるよー、相手もエースしか残ってないからな」

「わーってるって。こつからが楽しくなるところだろ！」

テンションが上がりすぎて、少しうるさかったからスピーカーの音量を下げた。そして、画面に映る自分の機体とリーダーを気にしながら、友人と会話を続けていった。そして、タイムオーバーが迫る

中、リアル連携で相手を落とすしていく。ボイスチャットの強みは連携が簡単に出来る事だ。特にオンラインの対戦では違い出る。そして、あと一機という所でゲーム画面がおちた。

「あッ!？」

パソコンの画面から友人の驚きが聞こえた。

「そっちも落ちた？なんかこっちも落ちただけだ」

「こっちも落ちた。回線か？でも、パソコン側は繋がってるしどういうこ…」

「お？声聞こえーぞ、もう少しマイクに近づいてくれよ」

そう言いながら、下げた音量を元に戻す。それでも相手の声が聞こえない。時折、何か声のようなノイズがはしるのだが、明確な音として捉えられなかった。

「だから、マイクに近づけて。聞こえーんだけど。」

その瞬間、友人の切羽詰まった声が聞こえた。

「ちょっとツツ!!マジヤベエ!!なんか吸い込まれツツツ…」

「おい!どうした!!」

ブチン!

突然、パソコン側のボイスチャットも切れた。最後の慌てようが気になり、携帯にもかけてみたが繋がらなかった。何度かパソコンと携帯で試してみたが、友人は一向に出る気配が無く、その日は仕方なく諦めた。明日になったら何かわかるだろうと。ただの悪戯シズメだったらと決めた。

次の日、会社帰りに見知らぬ番号から電話がかかってきた。とりあえず、会社の誰かからかもしれないと思い、電話にでた。

「はい、草野木です。」

「あ、もしもし、火口 明人の母です。草野木 陰人君？」

「あ、明人のおばさん。何かあったんですか？」

「よく連絡とってるって聞いてたから連絡したの、うちの子がどこに行ってるか知らない？」

「えっと、いまいち意味が分かんないんですけど、明人、捕まらな

いんですか？」

「そうなの、今朝、うちの子の会社から電話があつて入社してないつて言われて。何か連絡受けてますか？つて聞かれたの」

「珍しいですね、アイツが無断欠勤するなんて」

俺の友人事、火口 明人はヒヤツパーしてるところもあるが、礼義とかマナーに関してはきちんとしている。

「そうなの、うちの明人に限つてそれはないつて思つたの。でも、寮の部屋にも居ないつて聞いて。陰人君なら、明人から何か聞けるかなと思つて連絡したの」

「そうだつたんですか、本当に申し訳ないんですけど、俺も何も明人から聞いてません。すいません」

「いいのいいの、陰人君が謝る事じゃないから。もし、連絡あつたらこつちにも連絡くれるかな？」

「分かりました。明人から連絡きたらおばさんに連絡するようにさせますね」

「うん、お願い。それじゃ」

「はい、失礼します」

電話を切つたあと、頭に浮かぶのは昨日のアレだ。だが、その時は確証はなかつたのだ。

おばさんの電話から一週間がたつた。今では、新聞やニュースでは<行方不明者続出！突然、居なくなる人達！>とかそんな話題でもちきりである。明人が行方不明になつてから、突然、行方不明になる事件が増えた。警察の見解では、とくに行方不明になつた人達に関係性はないが、20代の若い世代が居なくなつていられるらしいとの事であつた。普通の行方不明であれば、それほど事件になることは無かつたが、有名タレントとかも居なくなつたらしい。それで重い腰を上げてみたら、今のような騒ぎとなつた。それでも、俺はいつもの日常、会社へ行つて働いて寝る生活を送つていた。

(生きる為には働かねば。金が貰えんからな)

アレからゲームはしていない。明人がいない状態でゲームをしても寂しいだけだからだ。

どっかの昔の偉人は言っていた。

友情とは、2つの肉体に宿る1つの魂である。

俺は、これを信じている。明人からみた俺があいつの親友かは分からないが、俺からみた明人は間違いなく、俺の親友だからだ。俺の半身ともいえる存在が巻き込まれたのだから、俺も必ず巻き込まれると、何故かこの時俺は確信していた。そして、ソレは起こった。

いつも通り、コンビニで弁当を買いアパートの部屋で動画サイト（18禁じゃないからな）を見ながら、弁当を食べていたその時、後ろに気配を感じた。

振り返ってみると、そこには黒い穴が空間に空いていた。そこから徐々に黒い手が滲みでるようにはい出してきている。それは、遅いが確実にこちらへと迫って来ている。

突然ではあったが、明人の件から心構えはしておいた。だから、俺は母親に最後のメールを送るため携帯を開いた。

ま、こんな訳だ。俺が遺書みたいなメールを作っておいた訳がわかっただろ。備えあれば憂いなしってな。俺は、遺書まがいのメールの送信ボタンを押した。一応、これで突然居なくなる訳じゃない。少しは、親の心配が減ればいいと思う。そして、俺の体にくつつもの黒い手が巻きつき、徐々に穴へと引きずり込む。あえて、自分から飛び込むつもりはなかったが、この黒い手の感触はいただけない。（いつそ、飛び込むか？）

どうせ、引きこまれるなら自ら進もうと足を出そうとした時、携帯が震えた。見てみると母親からだ。

電話が繋がらなかったからメールで。

陰人が何を思ったのかは分からないけど、かあさんとしては大事な

息子が居なくなるのは耐えられません。でも、陰人が自分で思っ
分で決めた事なら反対はしません。だから、1つだけ約束して。ど
んなに泥臭くてもどんなに醜くても生きる事を諦めないって。生き
てるから出来る事が必ずあるから。かあさんの自慢の陰人ならどん
な事も出来るから。だからね、必ず生きて顔を見せて。それだけは
約束。

いつてらっしやい、陰人。あなたの人生はあなたのもの。それは誰
にも変えられない真実だから。無茶だけはしないでね

母より

そのメールを見て不覚にも涙がこぼれた。愛されているってその時
心から思えた。だから、

(いつてきます)

俺は、穴へと踏み込んだ。

旅立ちの時（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

お気に入りしてくれた方、うれしかったです。

感想等、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6652x/>

龍炎のツガイと魔のオウサマ

2011年10月19日07時07分発行